

近世大名墓の構造について

— 国立西洋美術館出土清水家墓所を中心に —

今野 春樹

一 はじめに

一九九四年四月から約半年間にわたって、東京都台東区上野公園内の国立西洋美術館において、21世紀ギャラリー（仮）建設にともなう埋蔵文化財発掘調査が行なわれた。

調査において、最も注目すべき点としては、江戸時代、徳川御三卿のひとつ清水家の墓所発見があげられる。石室石槨をとまなう大型墓三基、石槨をとまなう、もしくははともなったと思われる小型墓三基、石列による区画のみのもの一基を確認・調査した。また発掘調査と並行して行なった寛永寺関連文書調査では、出土墓の墓域図と埋葬関連の絵図面もあわせて発見され、大名墓の構造の一端を明らかにすることができた。

本稿ではこれら絵図面と発掘調査の成果を関連させて、未だ詳細が明確にされていない近世大名墓、特に徳川家一門の墓所の構造と構築方法等について考察を加えてみたい。

二 調査の概要と歴史的環境

調査地点を含む上野忍ヶ岡遺跡は上野公園を中心した上野台に位置し、西側の不忍池のある谷と隅田川が流れる東京低地に挟まれた武蔵野台地の東端にあたる。国立西洋美術館（国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査団／団長加藤晋平國學院大教授）はJR上野駅の西側に位置する。その前庭部分（約二四〇〇㎡）の調査が行なわれ、その結果、旧石器時代ではチャート製剥片、縄文時代としては黒浜期の住居址一軒の他、調査地点全面より早期～後期の土器片が

数多く出土した。また弥生後期から古代にかけての住居址二三軒、古代の区画溝等が確認され、中世の遺物としては常滑産摺鉢、同安窯製青磁片が出土した。

近世初期、上野台には藤堂・堀家等の大名屋敷が営まれ、美術館周辺は伊勢藤堂家下屋敷跡と推定される。調査においても江戸初期とみられる区画溝が確認できた。

寛永元年（一六二四）に寛永寺が創建されると、三六の子院が建ち並び、調査地点付近には前田家の常照院があったとされる。元禄十一年（一六九八）の大火の後、凌雲院が現在東京都美術館の建つ場所から、国立西洋美術館、東京文化会館一帯に移築されると堀家や田安・一橋・清水のいわゆる徳川御三卿の墓所となった。今回の調査地点が清水家の墓所の一部に相当したことになる。凌雲院は寛永四年（一六二七）に堀丹後守直寄が建てたとされ、昭和三年（一九五七）に廃絶するまで当地に存続した。

三 出土墓の概要

寛永寺子院である凌雲院跡地の調査であるから墓の存在は予想していた。だが墓の配置はもとより、規模や数等具体的な情報は皆無であった。

調査を進めていくと、調査区の随所に丸い河原石を用い

た石列が検出された。墓絵図面発見後、この石列は塀などの墓地区画及び土壇の基礎部分であり、また調査中に6号墓と番号を付した石列は、実は4号墓墓域前庭部分に相当することが判明した（図1）。

石列は2・4・5号墓の主体部（埋葬施設）を囲んで配置されているが、1・3・7号墓は石列の外側に存在する。石列の構築状況は各墓とも共通している。4号墓を例にとると、石列の横断面形は逆台形を呈し、底部から直径二〇〜六〇cmの河原石、ローム主体土層、直径五〜三〇mm礫層、五〜五〇mmの礫とロームの混合土層の順で構築され、突き固められている（図2）。

主体部は六基確認されたが、いずれも近代以降に改葬されており、副葬品は出土せず、各墓石室石槨に損傷を受け、3号墓は掘り方のみの確認であった。

1・7号墓は規模・構造とも類似する（図3）。竪穴の平面形は約一・五m四方の方形を呈し、深さは二m以上を測る。その中に一×〇・九×〇・三m前後の板石を用い、三段積みみの箱状の石槨をつくる。1号墓の石槨内には木棺の一部が遺存していた。腐食が激しく、保存状態は悪いが、遺存する棺材片から底部が〇・六m四方の木棺が復元できた。墓穴及び石槨の規模・構造は港区済海寺の牧野家墓所に類似すると思われる（図4）。

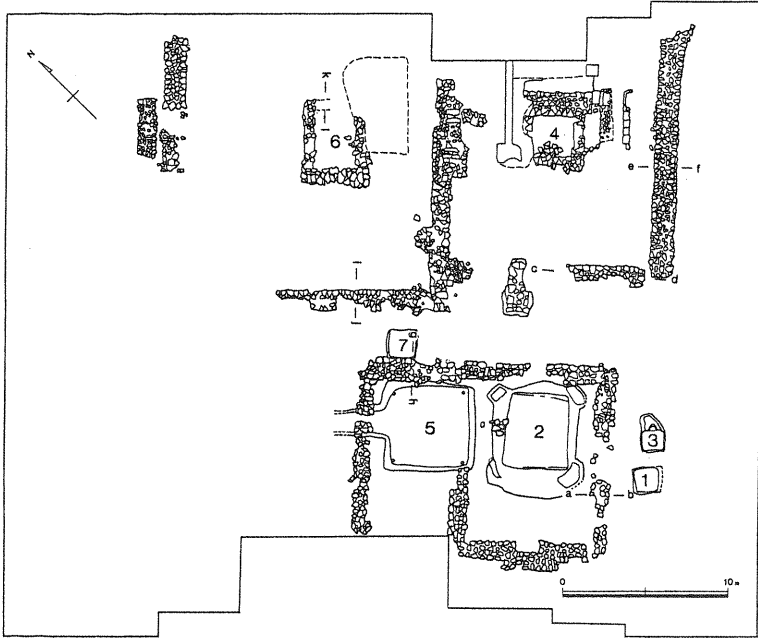


図1 墓分布図（数字は号数）

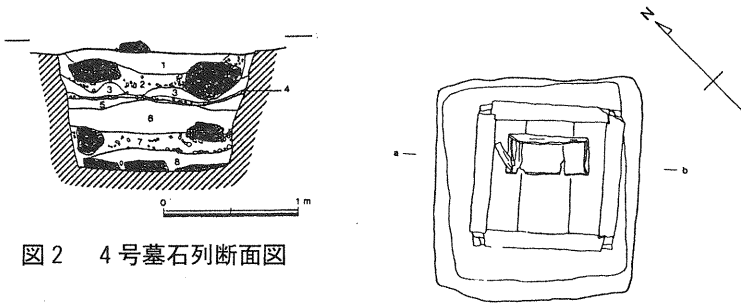


図2 4号墓石列断面図

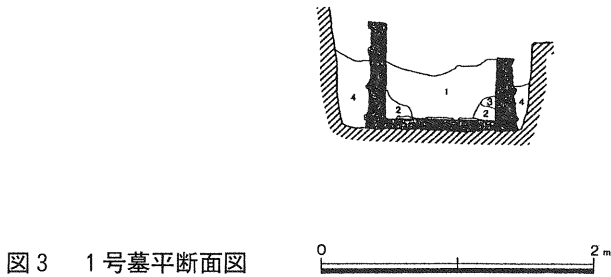


図3 1号墓平面断面図

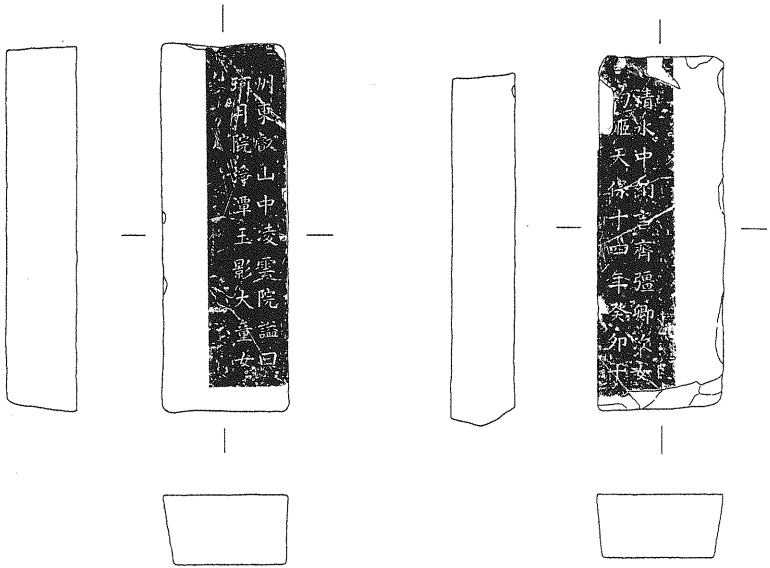


图5 7号墓墓誌

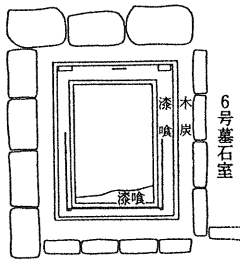
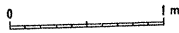
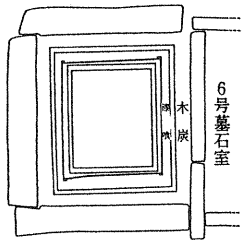


图4 牧野忠鎮墓
(濟海寺 1808年没)

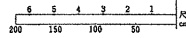
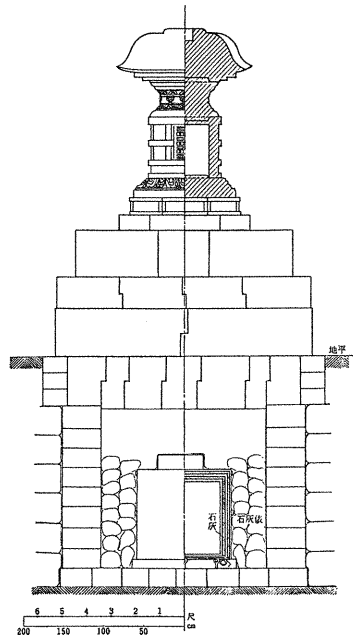


图9 天親院墓
(増上寺 1848年没)

近世大名墓の構造について（今野）

7号墓からは二枚の墓誌が出土した（図4）。記述内容から本来三枚あったと考えられ、その内の一枚目と三枚目であることが判明した。墓誌は緑灰色を呈した泥岩質の石材を使用。一枚目は○・八七×○・三一×○・一五mを測り、一行一〇字で二行にわたって「清水中納言齊彊卿次女鈞姫天保十四年癸卯」、三枚目は○・九×○・三×○・一七mを測り、やはり一行一〇字で二行にわたって「州東叡山中凌雲院諱曰 珂月院浄潭玉影大童女」と誌されている。

一文字の大きさは五×五cm、深さ五mmで刻まれ、一枚目の「清水く卿」間には朱が、以下には黒漆が入れられている。各墓の被葬者はこの墓誌発見が手がかりとなって判明した。被葬者の生没年・系図をまとめると（図6）になる。隣接する2・5号墓の石室石槨は、被葬者が配偶関係にあることや、埋葬時期が近いいためか、概ね規模・構造は共通する。4号墓は石室石槨を有する点においては2・5号墓と共通するが、石槨を含めた石室内の構造では異なる点が多い。また4号墓は寛永寺関連文書に墓所絵図面が発見されたことから、節を改めて、絵図面と比較しながら詳しく述べたい。

2・5号墓は、確認面からの深さで四mの縦穴に間知石を用いて、内測でともに二・五mの石室を築く。その内

号墓	法名	氏名（よみ）	性別	生年月日	没年	年齢
1	麗如院夢覚露幻大童女	延姫（のぶひめ）	女	天保12年（1841）10月6日	天保13年（1842）6月8日	1
2	寛量院正善映岳大居士	齊明（なりあき）	男	文化6年（1809）12月4日	文政10年（1827）6月10日	19
3	資成院覚幻發軔大童子	龍千代（たつちよ）	男	天保13年（1842）9月12日	天保14年（1843）6月7日	1
4	慈徳院	岩内膳正正利之女 於富之方（おとみ）	女	宝暦2年（1752）	文化14年（1817）5月8日	65
5	恭貞院	教宮（？）	女	文化5年（1808）6月	安政4年（1857）4月	49
7	珂月院浄潭玉影大童女	鈞姫（かたひめ）	女	天保14年（1843）2月16日	天保15年（1844）8月20日	1

* 1・3・7号墓被葬者の父母は齊明、西丸御書院番南条権之丞女シズ。

被葬者系図

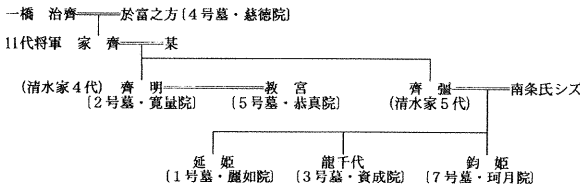


図6 被葬者関係

側に安山岩質の石材を用いて、外測でともに二・二mの石槨を設置する。石槨を構成する石材には接合部分にはぞが刻まれ、繋ぎ目には鉛製の楔がはめ込まれている(図7)。

両墓とも石槨内からは、大量の炭化物が検出された。石槨内に炭化物が検出される例は増上寺徳川家墓所においても見られる。炭化物には除湿・防腐の効果があるとされ、清水家、徳川家墓所で見られるのもそうした効果を期待してのものと思われる。

2号墓は改葬時の破壊と腐食のため、木棺の遺存状態はきわめて悪い。一方5号墓は上部の大半が破壊されているものの、底部は辛うじて残っていた。木棺底部は一m四方を測る。この木棺内にブロック状に硬化した石灰が残存していた。その状況から出土した木棺の内側にもう一つ棺が入れられていたことが観察される。棺と棺の間に石灰が詰められており、これは棺内の気密性を高める効果を期待してのものと思われる。棺内に炭化物・石灰を詰めることは大名墓には一般的であったらしく、増上寺徳川家墓所のほかに済海寺牧野家墓所・伊達政宗墓にも共通してみられる。棺材は5号墓では樹齢五〇年のヒノキの心持材、2号墓ではヒノキとモミを用いていた。当時の棺材にはヒノキが高級品として用いられた可能性が高く、ヒノキの存在は肯定できる。しかしモミが庶民クラスの早桶などに多く用い

られたとされるので、大名クラスの棺材の一部に利用されたことは、ヒノキの高騰などの別な理由があったと考えられる。

大名墓の埋葬時に使われる棺数については、報告数が少なく、比較検討する類例が乏しい。そのうち明確に棺数が確認できるのには近年では増上寺徳川家墓所・済海寺牧野家墓所・伊達政宗墓・榊原康政墓がある。榊原康政墓は火葬墓であり、済海寺牧野家墓所・伊達政宗墓は埋葬施設の規模・構造が根本的に異なる。清水家は田安・一橋家とともに将軍を出す高い格式を持つ。よって棺数を推測するに足る例は、同族であり埋葬施設の規模・構造が類似する増上寺徳川家墓所のみである。

2号墓被葬者清水家四代齊明は一九歳で没したことから成人男子として考えたい。増上寺徳川家墓所においての成人男子の墓は七基が報告されている。そのうち二代秀忠は木棺についての報告がなされておらず、六代家宣の父綱重は棺の腐食が激しく棺数は確認されなかった。また七代家継は八歳で没したが墓の規模・構造が他の将軍墓に準じているので類例に加えたい。

将軍墓は基本的には外棺として銅棺が使われ、その内側に木棺が置かれる(図8)。各将軍墓の棺数は六代家宣一銅棺一木棺、七代家継一銅棺三木棺、九代家重一銅棺五木

近世大名墓の構造について（今野）

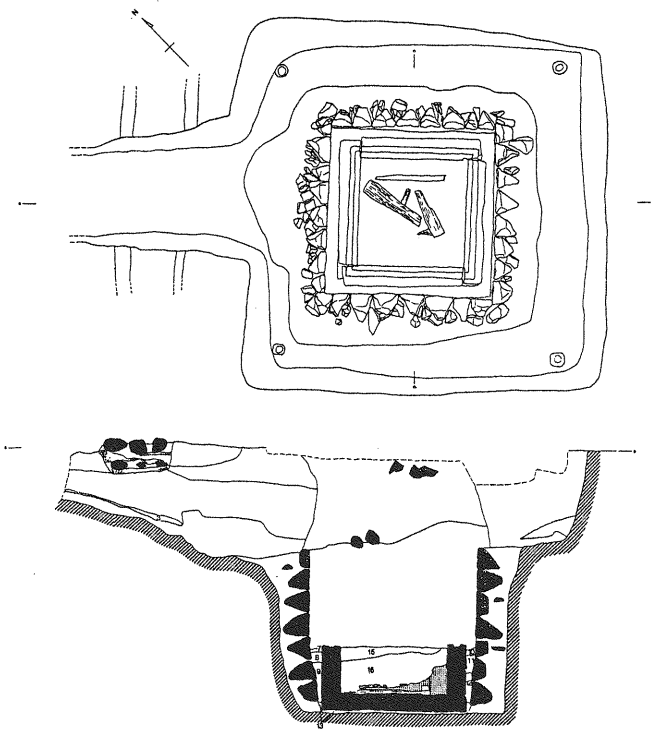


図7 5号墓平断面図

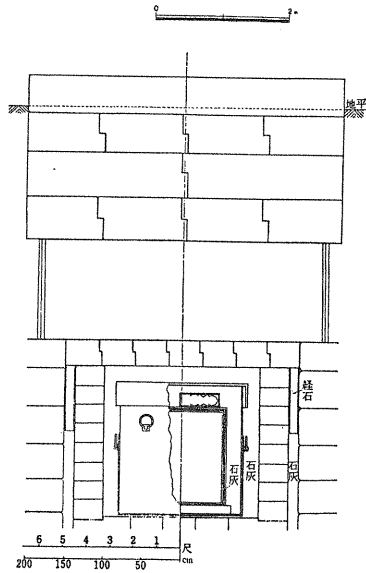


図8 徳川家慶墓
(増上寺 1853年没)

棺、一二代家慶一銅棺二木棺、一四代家茂一銅棺三木棺を数える。

2号墓の調査では出土した木棺の外側には將軍墓に共通して見られる銅棺は出土していない。配偶者の墓である5号墓が二棺以上であると推測され、また同時期に没した一二代家慶（一八五三年没）が二重木棺であることから、2号墓は少なくとも二重以上の木棺を有してたと推測される。

5号墓の被葬者は齊明夫人恭真院教宮である。同じく増上寺徳川家墓所では成人女性の墓として將軍正室・側室七基が報告されている。各墓の棺数は桂昌院光子二木棺（三代家光侍女、五代綱吉母）、月光院輝子二木棺（六代家宣侍女、七代家継母）、天親院任子三木棺（三代家定夫人）、静寛院宮親子内親王三木棺（一四代家茂夫人）、天英院熙子二木棺（六代家宣夫人）、廣大院寔子二〜三木棺（一一代家齊夫人）を数える。

調査から少なくとも二重棺以上であることは判明している。恭真院教宮は伏見宮貞敬親王の女であり安政四年（一八五七）に没している。同じ皇族出身では静寛院宮親子内親王（父仁孝天皇、一八七七年没）、没年が最も近いのは天親院任子（父関白・鷹司政熙 図9）があり、嘉永元年（一八四八）に没している。いずれも棺が三重であり、ま

た出身階層と没年代を考慮すると5号墓の棺数は三棺であったと推測される。

また、文献調査において発見された寛永寺関連文書の一つ「浄観院様御葬送絵図」（東京国立博物館蔵）には、天保二年（一八四〇）に没した一二代家慶夫人樂宮喬子（父有栖川宮織仁親王）の木棺図が描かれている（図10）。これも三重であり、左から「御内箱」「御槨」「御棺」と記されている。

各寸法は「御槨」は「三尺七寸七分」（一・一四m）四方、高さ「三尺六寸六分」（一・一七m）、厚さ「八分」（一・四二cm）、「御棺」は「三尺二寸七分」（九八・一m）四方、高さ「三尺五寸」（一・〇六m）、厚さ「八分」（二・四二cm）、「御内箱」は「二尺六寸五分」（八〇・三〇m）四方、高さ「三尺四分」（九二・二二m）、厚さ「一寸二分」（二・六三cm）を測る。

浄観院も恭真院とは没年も近く、出身階層も同じくすることから棺の大きさも同様なものであったと想像される。

四 4号墓と絵図面の比較

先にも述べたが、4号墓については寛永寺関連文書の調査から、墓域や埋葬施設、埋葬方法を詳細に記した絵図

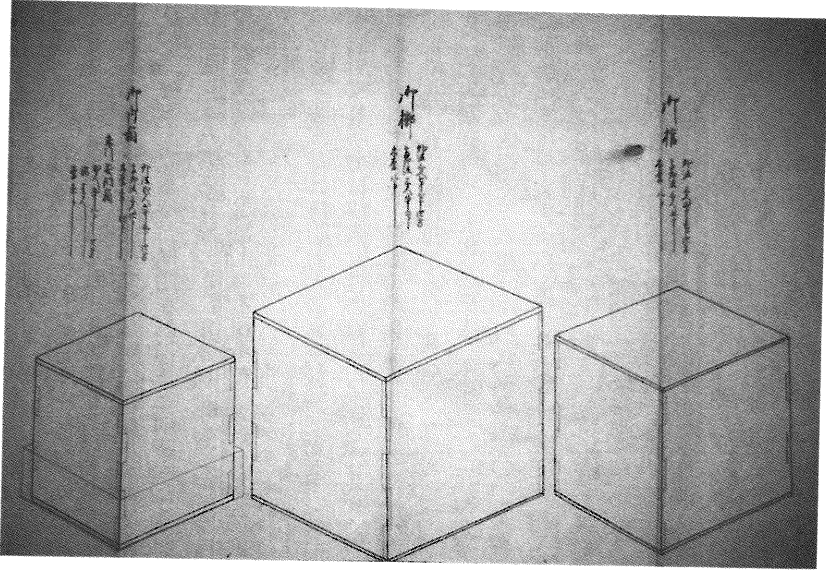


図10 浄観院棺槨図

面が発見された。絵図面は「江戸上野慈徳院霊屋図」（東京国立博物館蔵）。巻物であり、文化一四年（一八一七）五月八日、慈徳院を埋葬する際に立ち合った川村某によって書き写されたとされる。以下において発掘調査によって得られたデータと絵図面を比較検討してみたい。

墓域区画を描いた絵図（図11）の発見によって、正確な墓域形態・規模が明らかになった。4号墓として調査された部分は全墓域内での本庭部（宝塔部）にあたり、石列のみが確認された6号墓は4号墓全墓域中の前庭部に相当することが判明した。

墓域は東南・北西方向に主軸をもち、北西が墓の入口になる。主軸方向に並ぶ南石列は直角に接する西石列から実測値一九・六mでL字状に北へ曲がる。絵図中には同部分の距離が「十間半」（一九・〇九m）と記され、発掘での実測値に近い。墓域の短軸幅は絵図では、宝塔の背後に「八間」（一四・五四m）としか記されていない。この部分の実測値は墓の北東部が美術館建物に破壊されているため、調査では一四mまでしか確認されていない。

前庭部の入口には「御中門」と記され、門が設けられている。門前には三段からなる階段が設けられ、前庭部が地表面よりも一段高く土壇が築かれていることがわかる。調査においても、階段部分に北西に張り出した石列が認めら

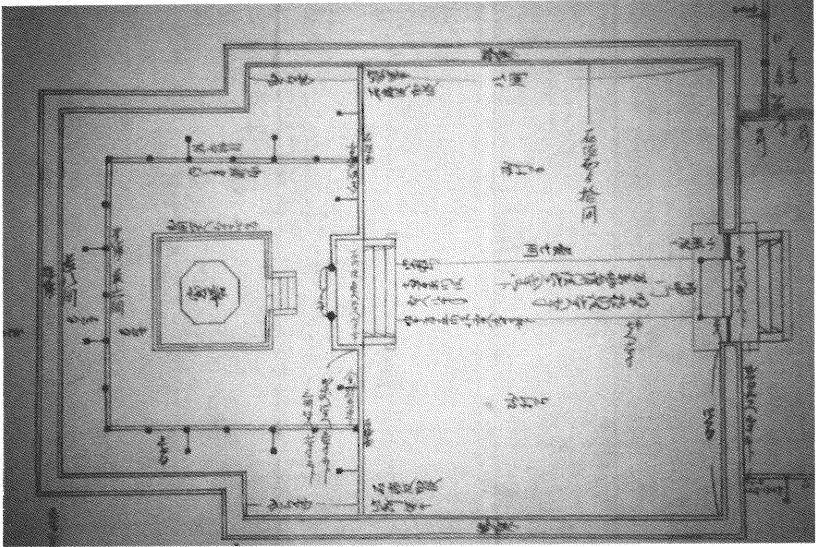


図11 恭真院墓域図（右下が北）

れた。しかし土壇や階段の高さは記されておらず、階段幅が「壹丈四尺式寸八分」（四・三三m）と見えるのみである。「御中門」から宝塔のある本庭部へは幅「七尺六寸」（二・一三〇m）、長さ「七間」（二一・七二m）の墓道が延びる。墓道の両側、つまり前庭部一面には「砂利」が敷き詰められていたことが絵図に記されているが、墓道・砂利は発掘調査では確認されなかった。

本庭部入口にも階段が造られ、その痕跡は石列中央部の東への張出として認められる。ここにも「御廟門」がつくられる。やはり階段の高さは不明だが、幅は「五尺六寸二分」（一・七〇m）と見える。

本庭部は前庭部よりもさらに一段高く土壇が築かれ、その中央に「二間四尺五寸」（五m）四方の石積み基壇が築かれ、上に宝塔が安置される。基壇の痕跡は発掘調査でも認められ、実測値5mを測った。

宝塔は残っていないが、先ほどあげた「浄観院様御葬送絵図」に浄観院の宝塔絵図がある（図12）。絵図右上には朱書で慈徳院の宝塔をモデルに作製した旨が記されており、本墓にも同様の宝塔が置かれていたと考えられる。

宝塔は石製であり、基壇上に三段を数える「御八角座」を組んだ上に据えられている。高さは八角形台座を含め、「御九輪石」まで「廿壹尺四寸」（六・四八m）を測る。ま

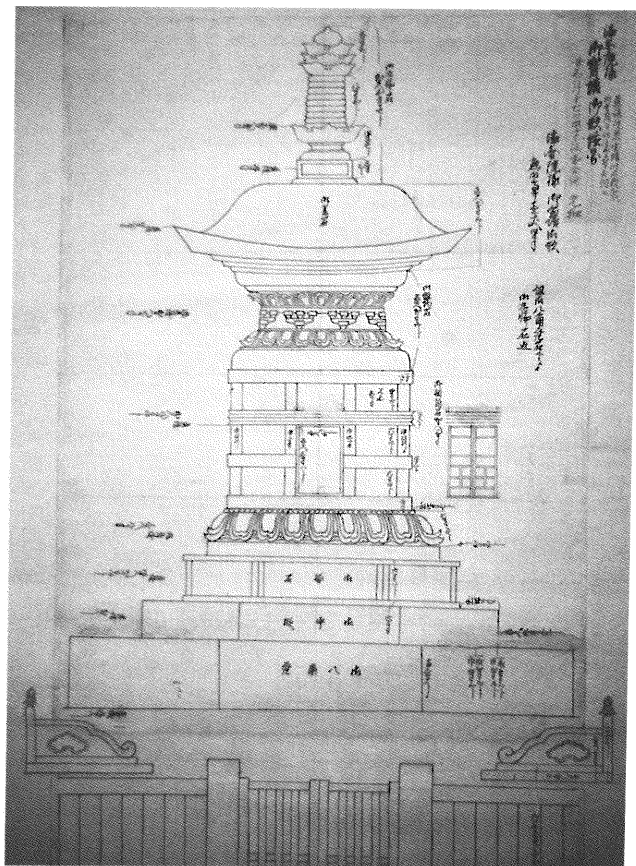


図12 浄観院宝塔図

の各部分の寸法が細かに記されている。間知石積みみの石室は発掘では四段まで確認できたが、絵図では七段積み、内測で「七尺八寸」（一・三六m）四方、深さ「七尺八寸」（一・三六m）を測る。石室と石槨の間は絵図で「六寸」（一八・一八cm）の隙間があり、ここに「煉土」が詰められている。調査でも灰白色のセメント状のもの流し込まれていた。

石槨は発掘では二段まで確認できたが、絵図では五段積み、外測で「六尺六寸」（二m）四方、高さ「六尺」（一・八一m）を測る。蓋石は出土しなかったが、厚さ「六寸五分」（一九・七〇cm）の石材六本使用されていたことが絵図に見られる。石槨石材は2・5号墓が荒く面取りを施しているのに対し、4号墓はきわめて滑らかに研かれており、また繋ぎ目には2号墓の九倍強の五六〇gもの鉛製楔がはめ込まれていた。

た絵図には基壇の前に石門・石柵があったことが描かれている。

図13からは石室と石槨の構築状況が読み取れる。図左は石室を横から、図右は真上から見たものであり、石室石槨

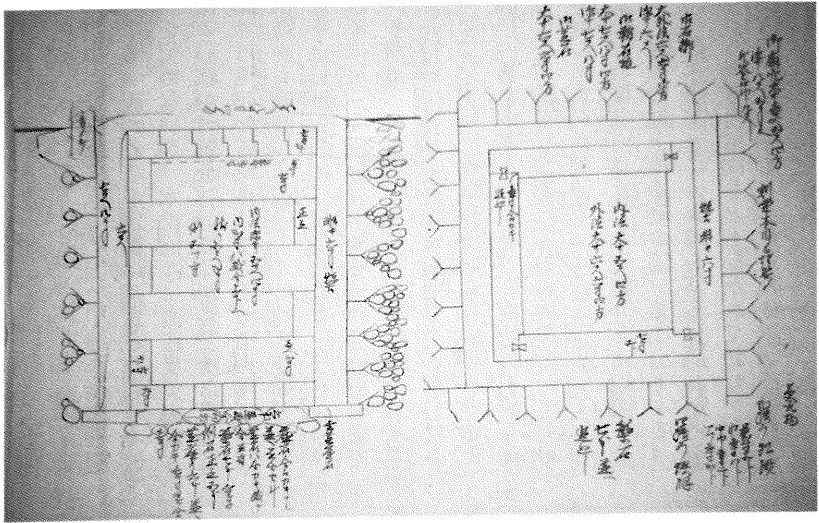


图13 恭真院石室石柵图

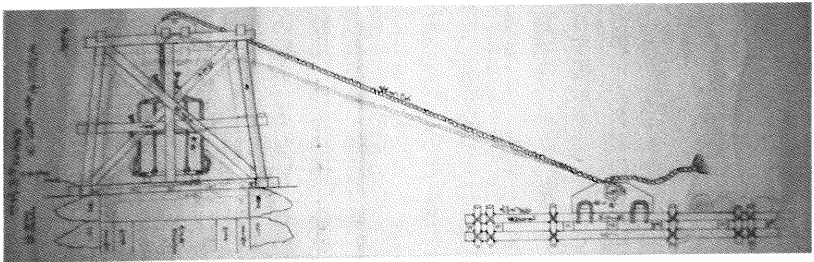


图14 恭真院降棺图

近世大名墓の構造について（今野）

図14は木棺を石槨内に降ろす際の描写と思われる。石室上に滑車の付いた櫓を組み、離れた場所に設置した器具「しゃち台」によって綱の長さを加減しながら木棺を石槨内に降下・安置すると思われる。木棺は腐食と改葬時の破壊によって原型を留めないが、木棺周囲に高密度で充填された石灰に、棺の形状や付属金具の痕跡が鑄型状に残っていた。木棺の高さは上部が破壊されているため不明だが、石灰に残った痕跡から底面が一边〇・九mの直方体であり、底部に環状の把手金具が一面に二個付くことが推測される。図から木棺の底部に付く環状金具が綱をかける役割を果たしていたことがわかる。

4号墓は2・5号墓に比べ、石室の石組みや石槨石材の面取りなど細かな部分まで丁寧に仕上げられている。また石室と石槨の間に「煉土」を入れたり、石槨内に石灰を高密度で充填するなど、厳重な埋葬状態から被葬者の生前の身分の高さが彷彿とさせられる。

「江戸上野慈徳院霊屋図」にはここで紹介した絵図の他に廟堂、霊屋など墓所の地上構造物を描いた部分もある。また「浄観院様御葬送絵図」には木棺を墓所へ運ぶ際に用いられたと思われる輿の分解図なども描かれており、どちらも近世大名の墓制、葬制を知るうえで興味深い資料といえる。

五 まとめ

本稿では、発掘調査によって得られたデータをもとに、過去の調査事例と文献資料との比較・検討を試みた。結果的には発掘データと絵図面が重なり合い、墓の構築にはそれなりの方法論が存在したことがうかがわれた。

近世大名墓は伊達政宗、池田忠雄、榊原康政、牧野家、増上寺徳川家など調査の類例は少ない。しかし、ここで紹介した清水家を含め、徳川一門と伊達、榊原などの外様・譜代大名と比べると、墓の規模・構造の差が歴然とする。

これは大名の経済力などもその要因の一つであろうが、格式や身分ごとの墓制が確立されていたことが考えられる。

過去の大名墓の調査は、副葬品や人骨の人類学的調査に重点が置かれる場合が多かった。今回は調査を行なった墓の絵図面発見により、墓域を含めた「墓」全体の規模・構造等を解明する手がかりを提示することができた。ここで紹介できた資料が今後の近世大名墓の研究において活用されれば幸いと考える。

参考文献

鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行

一九六七「増上寺 徳川將軍墓とその遺品・遺体」東
京大学出版会

伊東信雄

一九七九「伊達政宗の墓とその遺品」瑞鳳殿再建期成
会

港区教育委員会

一九八六「長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告」

館林市教育委員会 一九九二「榊原康政の墓」

江戸遺跡研究会

一九九六 第九回大会「江戸時代の墓と葬制」

国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会

一九九六「上野忍ヶ岡遺跡 国立西洋美術館地点」

〔付記〕

本稿執筆にあたり多大なるご助力を頂いた村田佐智子さ
ん(千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会)にこの場を借りて深謝し
ます。

(國學院大学大学院日本史学専攻後期課程)